非水百花譜

第貳輯

大正
9.5.19
内交

始

非水百花譜 第貳輯目次

れんげつつじ（羊躑躅）
ぼたん（牡丹）
きいちご（懸鈎子）
つゆくさ（鴨跖草）
まつよひぐさ（待宵草）

れんげつつじ（蓮花躑躅）

學名 Rhododendron Sinense, Sw. Azalya mollis, Blume. Azalya sinensis, Lodd.

漢名 羊躑躅、老虎花、黄杜鵑

和名 きれんげ、れんげつゝじ

科名 石楠科（Ericaceae）

本邦中部の山地並に支那に自生せる落葉灌木にして、高さ四乃至八尺、もちつゝじに似たり。枝條は帶黄褐色にして新梢に毛茸を有す。葉は倒卵狀披針形にして鋸齒を有し、疎に毛茸を生ず。春期、葉の出づるに先ち、枝の先端に花をつけ、數花群生し極めて短き總狀花序をなす。花徑二寸内外にして赤黄色と黄色のもの、二種ありて、赤黄色のものはかばれんげ又はかうれんげと云ひ、黄色のものをきれんげと云ふ。兩性花にして多少左右相稱をなし、萼片は花瓣及心皮と同數にして五個なり。雄蕊十個にして花瓣より長く抽出し、又花瓣及雄蕊は萼の裂片間に擴がれる花盤の外緣に着生す。花瓣は合一して壺狀をなし、幼時は覆瓦狀に收めらる。葯は内向して花絲に附屬し、尖端開孔せり。花粉は四個合一せる特長を有し、胎座は中軸にありて胚珠を藏す

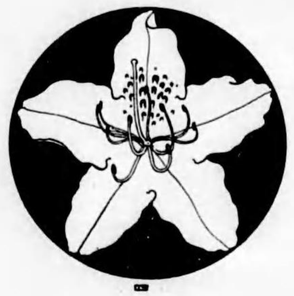
花柱は合一し、子房の頂端に縁れ、且伸長して頭狀の柱頭をなす。扁平なる種子は幅廣き翅を有す。花葉に毒あれども花美しきが故庭園に植え、又は盆養として愛せらる。

本種には俗名多く、左に主なるものを掲ぐ。

きつつじ、てうせんつつじ、ししくはず、きつねつつじ（紀伊）、うまつつじ（同上）、まめがらつつじ（同上）、うとつつじ、いぬつつじ（仙臺）、いはつつじ。

尚漢語の俗名には次の如きものあり。

關羊花、羊不食草、羯羊花、惱羊花



三

二

一

本圖 大正七年四月中旬東京に於て寫生（實大）

附圖 (一)印葉、(二)、(三)花芽（花芽の下なる小芽は葉芽なり）、(四)上部より見たる花（實大）

寫眞 大正八年四月二十八日、東京某庭園に於て田頭貞夫氏撮影

ぼたん（牡丹）

學名 Paeonia Moutan, Ait. P. Moutan, Sims.

英名 Tree Peony

異名 廿日草、ふかみぐさ、

科名 毛茛科 Ranunculaceæ.

支那に原産し、延喜年間本邦に渡來せる高さ二、三尺乃至五、六尺に達する耐冬落葉性灌木にして、初め藥用として栽培せられしも中古、大治、保延の頃より宮中に植ゑられ觀賞用として愛玩せられ、遂に今日の隆盛を見るに至れり。

莖は木質樣にして唯一個の維管束丈に木質輪を有し、根は肉質肥厚し塊莖狀に膨大せる上向性の地下莖を具ふ。

葉は淡綠色を呈する大形の二回羽狀複葉にして互生し、平滑なれど新葉は概して淡紅色を帶ぶるもの多し、小葉は二、三片に分れ更に深き缺刻を有すれど莖の下方のものは往々緣邊に鋸齒なきものあり。

五月頃各枝の先端に美大花を開く。花は淡紅色にして五乃至七、八瓣を有するを原種となせど、古來改良に改良を加へられ、幾多の園藝的品種を作出し、現今にては八重花は勿論、紫、紅、白、絞、黑紅等始ど總ての色を網羅するに至り、一種の芳香をさへ發せり。

兩性花にして放射相稱をなし、花葉螺旋狀に配列す。分離せる五片より成る萼は永存性にして、花瓣は著大、幅廣く、質極めて薄き絹の如き光澤あり。

無數の雄蕊は各分離し、葯は列開す。雄蕊の周圍には盞狀をなせる盤を具へ、子房上位にして心皮は無數なり。胚珠は倒生珠皮を有す。果實は一縫線より裂開せる單心皮果、即ち蓇葖にして肉質の假種皮を有し、種子には油を含める胚乳を藏す。胚は微少にして眞直、胚種は內種皮よりも遙かに長くして、よく發達せる外種子を有す。

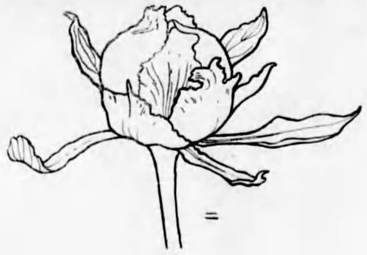
根に一種のアルカロイドを含み。大古は藥用として盛に使用せしも今は全く觀賞用として栽植するに過ぎず、時に花瓣を食用とするものゝれど一般的ならず。

備考、與本種の異名、漢名甚多し、其主なるもの次の如し。

なとりぐさ、てるはぐさ、やまたちばな、とたもぐさ、よろひぐさ、

よしろぐさ、すべらぎの花、花王、鹿茸、鼠姑。

一



二

圖本 大正七年五月三日東京に於て寫生、（實大）

圖附 （一）葉印、（二）花蕾、（實大）

寫眞 大正七年五月中旬著者撮影

羊躑躅

（發行兼印刷人）杉浦井水貴

（賣捌）大倉牛兵衛

（賣捌）田口陽堂

（賣捌）菊松堂

東京市日本橋區通四

きいちご（木苺）

學名 Rubus palmatus, Thunb (var. conolifolia, Fr. et Sav.)

漢名 懸鈎子

異名 あはいちご、もみぢいちご

科名 薔薇科 Rosacea.

木屬中の一種に紅色の麗はしき果實を結ぶものあるて、古來賞美せられしが爲 Rubus（赤色 rub. を意味す）なる屬名を有し、且つ本種は掌狀をなせる壯大の葉を有せるが故 Palmatus（掌狀を意味す）なる名を附せられたり。

山野に自生せる耐冬落葉性の灌木にして、高さ四、五尺に達し、莖葉に刺を有す。此刺は歩行の際、衣服にかゝる事あれば、此の故を以て懸鈎子なる漢名を生じたるならむと思考す。

葉柄を以て互生せる葉は稍々長味を帯び雄大にして、五、六片に分裂せる掌狀を呈し鋸齒を有す。五月頃、白色五瓣の山吹に似たる花を開く、單一花なり。

雄蕊は無數にありて、下部擴大、上部狹小、花托は稍球根狀を呈し、中空宿存性にして内に心皮を有す。心皮は無數にして隆起せる子房柄上にありて二個の胎珠を藏す。

夏日、黄色の果を結ぶ。果は閉果にして多數の小核果より成る石果なり。

果實を食用に供し、又觀賞用として庭園に栽植せらる。

備考。本種の異名、俗名は前掲の外、尙次の如きものあり。

つるきいちご、さがりいちご、かないちご、ほほろいちご、さいちご

本圖 大正七年四月東京郊外下諏谷に於て寫生（實大）

附圖 (一)花の正面、(二)花の側面、(三)果實、(五月三十日寫生)

(四)印葉（新葉）、(五)印葉（舊葉）、(以上實大）

寫眞 大正八年五月九日岩手縣志戸平温泉附近にて著者撮影

牡丹
（第二輯）
杉浦非水畫
大倉午兵衛刻
酉村吉摺
春陽堂熊發行
東京市日本橋區四

つゆくさ（露草）

學名 Commelina communis, L.

漢名 鴨跖草

異名 ほうしばな、螢草、つきくさ

科名 鴨跖草科 Commelinaceae

山野路傍に自生せる多年性又は越年性の草本にして、節を有する莖は地に匍匐し、各節よりは根及新芽を出し、初夏の頃より晩秋迄可憐なる藍色の花を開く。

高さ一尺餘に成育し、廣披針形又は稍狀の半行脈を有する葉を互有す。葉柄は稍狀をなして莖を包み、蛤合せる佛焔狀又は編笠狀の苞内より花梗を出し藍色の粟穗花序を有する花を開く。花梗は二條ありて下部のものは他のものと大に異り、子房も亦不完全なるが故に雄性花と見るを得べく、且つ早落して他花の開花する頃には唯其の花梗のみを殘す。然れども時として完全なる子房を有し、立派なる果實を結べるものもあり。上部の花梗には三、四花をつけ、皆完全なり。

蕚は外方にありて殆ど無色透明の膜質なる三片より成り互に分離せり。花は兩性にして花序は葉腋より生じ、三個の花瓣は不整齊にして蕚と互生し、互に分離せり。上方の二片は大にして美麗なれど下の一瓣は蕚と同質の膜にして小なり。雄蕊は六本、内部の成熟したる後、外部のもの熟す。花絲は長く其の大小、形狀同じからざれど内、二、三個は二室に縦列せる完全の葯を有し、黄色の花粉を飾ふれど他のものは皆密嚢狀に變じて時に少許の橙黄色の花粉を出すのみ。

子房は一個ありて合着せる三個又は二個の心皮より成り、上位にして全く無柄、而して二又は三室を有し、各室には概ね只少數の直生せる胚珠を有す。花柱は單一にして長く、雄蕊と略長さを同うし、柱頭は其先端にありて頭狀をなす。

二乃至三室を有する蒴果は楕圓形にして二、三の瓣に胞背裂開をなし、種子には皺襞あり。胚は小さく、多量なる内胚乳の一方に偏せり。本種の花瓣より藍色の液を搾り、之を紙に浸して藍紙と稱へ、友禪染などの下繪を布絹の上に寫しとるに用ゐらる。

備考、本種の異名、俗名は數多けれど其主なるものを揭ぐれば次の如し。

青花、ちくさ、ほうしくさ、べべしくさ、かうやのおめえ、苔鴨舌草、碧竹子、竹鴨草、竹葉菜、淡竹葉、碧蝶花、耳環草、藍姑草、

本圖 大正七年六月二十五日東京に於て寫生（實大）

附圖 (一)花の側面、(二)花の正面、(三)花の背面、(四)花の上面、(五)花冠の側面、(六)果實、(七)雄蕊の群、(八)雄蕊（割大圖）、(九)苞を取り去りたる花の側面、(十)印葉、(八)を除くの外實大）

寫眞 大正八年七月東京に於て著者撮影。

懸鈎子
（第二輯）
杉浦非水畫
大倉半兵衛刻
桃淵巳之助摺
春陽堂發行
東京市日本橋區通四

まつよひぐさ（待宵草）

學名 Oenothera odorata, Jacq.

異名 やはずきんばい

科名 柳葉菜科（Onagraceae）

本邦各地に自生せる越年性草本にして、特に東京府下玉川沿岸は其の產地として有名なり。性頗る强健、一度播種すれば年々種子を散じ恰も雜草の如く繁茂す。南米智利の原產にして嘉永年間の舶載にかゝるものなれど今は各地に分布せられ、恰も本邦原產の如く思惟せらるる事多し。

草丈二、三尺、多くの枝を分ちて叢生し、初夏の頃より淡黃色の美大花を特に日沒の頃開く故に待宵草の名あり。

葉は長卵形にして幾分の鋸齒を有し、根葉の中筋特に白し。花は各葉腋に一個を生じ、直徑凡そ一寸程の四瓣花にして各瓣の先端に一個の缺刻あり。雄蕊は八個、雌蕊は一個を有し、葯及花粉共に黃色、又同處のある種の如く花に小包を有せずして柔調すれば花瓣紅變す。

蕚は長さ凡そ六、七分、幅二分程にして元來は四片に分るれど併後して二片となり、花を全く包みて保護の用をなせど、開花と同時に反卷し後落下す。

子房には四個の溝ありて、花托は子房より幾分長し、果は柳葉菜に似たれども之より大なる蒴果をなし、熟すれば四裂して褐色の種子を散ず。種子は毛冠を有せざれど頂端に環狀の隆起ありて中央に窪みを生ぜり。

本種は前述の如く特に夜間に於て開花するものなれば蛾のみに依る他花受粉なり。（第一輯おほまつよひぐさ參照）

備考、(一)、花頗る美大なるが故好みて庭園に栽培せらる。本種の栽培は頗る容易にして日當よき排水完全なる地を選び秋期又は春期下種し、發芽後密生せる所を間引き、凡そ一尺餘の距離間隔をなし、一二回施肥すれば五月頃より開花せしめ得べし。

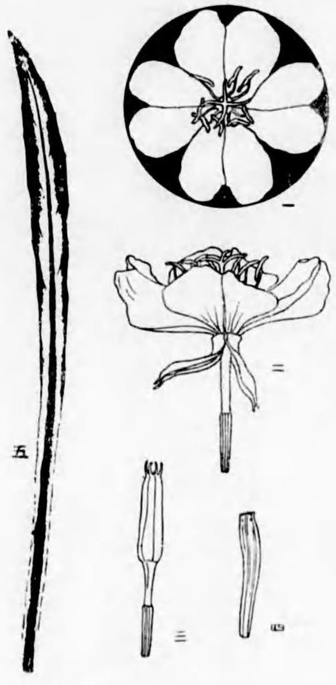
(二)、本種の邦名を月見草と稱するものあれど、月見草なるものは全く別種にして學名を Oenothera tetraptera, Cavan. と稱へ、外形略ぼ待宵草に似たれども花は白色にして然も葉は披針形の齒狀羽裂をなすに依り異りとす。猶、月見草の原產はメキシコにして待宵草の如く多からず。

（牧野富太郎氏）

本圖 大正七年六月十四日武藏多摩川二子の渡にて寫生（實大）

附圖 (一)花の正面、(二)花の側面、(三)花蕚、(四)蒴果、(五)葉、（實大）

寫眞 大正八年七月相模茅ヶ崎海岸に於て田頭凱夫氏撮影。



鴨跖草
（第二輯）
杉浦非水畫
大倉生兵衛刻
西村熊吉摺
春陽堂發行
東京市日本橋區通四

終

待宵草

（第二編）

杉浦井水書

大倉半兵衛刻

（編輯）

田口菊松摺

春陽堂發行

東京市日本橋區通四